

## 泣いた赤おに

あるところに赤おにが住んでいました。赤おには人間と友だちになりたいと思っていました。しかし、自分とはまるですがた形のちがう赤おにをこわがって、友だちになるのはおろか、話さえ聞いてはくれません。

赤おには、一番の親友である青おにに、相談をもちかけてみました。青おには言いました。

「ぼくが人間をいじめるから、きみはぼくをやっつけて人間を助けてやるんだ。そうしたらきみは人間から信用されるだろう。ただしこれはお芝居だからね。」

青鬼の言うとおりに、赤おには人間と友だちになることができました。赤おには青おにの友情に心から感謝しました。

ある日、赤おにが青おにの家をたずねてみると、表はしまつてひっそりとしています。そして、立札がかけられていました。そこには赤おににあてて、こんなことが書いてありました。

ぼくときみが仲良くしているところを、もし人間に見られてしまったら、お芝居をしたことがわかってしまいます。だから、ぼくはきみにあわぬよう旅に出ます。

これを見た赤おには、日のくれるまで泣きました。

## 王さまをほしがったカエル

ある池に、カエルがたくさんすんでいました。世の中を見ると、たいいていの連中は、王さまという、だれが支配するものをもっているのに、自分たちのところには、だれも支配者がいないのを不満に思っ、セウスさまに、わたしたちにも王さまをくださるよう、とたのみました。

セウスさまは、カエルどもの人のよさといいますが、とんまさといいますが、それをおかしくお思いでしたが、カエルどもがどうするか、ためしてやろうと考え、一本の材木を池の中へ落としておやりになりました。

カエルどもは、大きな音が生木が落ちてきたので、たまげて池の底までもぐりこみました。よっぽどえらい王さまが、天からおりてきたと考えたのです。

しかし、ときがたつにつれて、その材木は、ただじつと浮いているだけで、なにも言ったりしませんので、カエルどもはしだいに、その木をほかにするようになり、しまいには木の上にあがって、すわりこむものもいました。

それでとうとう、みんなで相談して、もう一度、セウスさまのところへ代表をおくることにしました。

そして代表のカエルは、

「はじめにいただいた王さまは、ちよつとのろまで、なまけものすきますから、もう少しかしこいかたと、とりかえてくださいませんか。」

とたのみました。

セウスさまは、カエルどものほかさにあきれて、今度はみずくひをおつかわしになりました。

それで、カエルたちは、みずくひに片っぴしから食われてしまいました。